



門加
998
卷一



近代世事談序

小序
玉泉文庫

山谷非世之人。教誨遊學之者。
強國致切之士。江海間暇之夫。
熊經鳥申之翁。其所好也。非其
所好也。孰知天下其所好哉。其

端其塗樊然其事其談亦樊然
焉。今也有近代世事談其事其
談也亦樊然而世代之微也其
所好者何人者也乎。人士夫翁
者無所不好。無所何乎樊然世

代之微。事談之原始者也云。
享保癸丑冬至日

浪花 松永據德書



凡例
 一 凡和漢品物乃本源を記すの書故ありこれ
 三皇五帝天神地祇比原より記せり
 今斯書は天正慶長以来を断る
 遠き永享文明の頃と條々記す
 品も神加へあるひに始元の事いふ
 こととその事物の同異を記す
 近代記すの品物あるは其の限あり
 且此より臨み浮き所の事物も牛馬
 一色より記すもの
 一 凡例開れ書百有余軸その條毎に記す

凡例

一 凡和漢品物乃本源を記すの書故ありこれ
 三皇五帝天神地祇比原より記せり
 今斯書は天正慶長以来を断る
 遠き永享文明の頃と條々記す
 品も神加へあるひに始元の事いふ
 こととその事物の同異を記す
 近代記すの品物あるは其の限あり
 且此より臨み浮き所の事物も牛馬
 一色より記すもの
 一 凡例開れ書百有余軸その條毎に記す

一 門部の前後歴代の遠近或は品物の差別
 衆多の勝をよるをいふは必ずしもの多
 を常に考ふと勝は其部類にあて
 べきとあるをいふは統く
 一 本邦近世の品物其原水を求むるに
 異邦の原始は不尋
 一 其國其所の如くいふは必ずしもの品物
 際限なく追考追加あり

東都神田窪下菴沾漁識

本朝世事談綺卷之一目錄

○
衣い
服ふく
門もん

天^ひ 沖^お 遅^お 臆^お 孝^た 菖^さ 袖^そ
鵝^が 所^し 羅^ら 女^に 深^ふ 子^こ 草^く 被^ひ
滅^め 深^ふ 深^ふ 後^ご

金襴甚多
友與法
紙衣泉
袖緣深
一

木綿
糸深
大久保小波
小波子
正平深
一端定尺
道服
羽織

上下

線帽子

吉永結

吉田市

綿黄川解

白衣

沃無帽子

油皮

夜着

縹帽子

女前帯

異紙袋

蒲団布子

飲

食門

茶

金流

利休流

塩漬

茶湯

石川流

紹興酒

干菓子

有樂流

遠州流

多波古

丸屋求肥

大佛餅

采慢改

花園餅

香物

豆腐

地黃羹

蒲鉾

源五郎餅

道正解毒

東山小粒丸

歩世餅

缺餅

蕎麥切

沃菴漬

紙團豆腐

水餃

擗焼

塩方

西大寺

外郎

花慢改

餅屋

慣食

一休納豆

豆腐田樂

焼鹽

浅草川白魚

定斎藥

菊岡沾涼述



○天鵝絨

正保慶安のころ京師にて織はむとのひしを
織事をうへて一とせ返しなる中針織のあり
たるをえて織る紙得る織線を横に通し織ぬ
克く後剝かすのものも其上糸を切り織入る織線を
をとりしある時に切る糸のものをいふなりとの
先次天鵝絨の好異よりなるゆゑなり

○金縷唐織

奉^{ほう}明^{めい}に織^{おり}と^とし^しる^る今^{いま}綱^{なわ}の^の京^{きやう}西^{せい}陣^{じん}野^の本^{ほん}氏^し々^々
唐^{たう}威^いの^の西^{せい}陣^{じん}儀^ぎの^の織^{おり}不^ふけ^け也^や

○本
棉

親聚圖史云桓武帝延曆年中
崑崙人二河國
老實なるものをとて孫種と云ふを人
とむしむる中世に於て終る

衣笠内府

文祿年中、又將をくくしの製を倣ひ、具を調へ、
 今至室となす事いまだ百五十年をすたふじ、
 早膳の老蜃縹をきき事あいにど麻布のせぬ、
 穂原を入てきるとして、史記叙文云木綿江南多有之

らぬいりててし母は福神と称はる大黒あまじ
 頭よりあまの地よりあまのまゝありて我々もあまの
 めん色あまのいゝをふくむ成仙さるるあまの
 おまの袋に財宝を藏に桂の葉の具をさるるも
 めをさるるあまのいゝをふくむ成仙さるるあまの
 小櫃しあまのあまのいゝをふくむ成仙さるるあまの
 おまをふくむあまのいゝをふくむ成仙さるるあまの
 大黒より付て神釈りくの伝わりさるるあまの
 神よりあまのいゝをふくむ成仙さるるあまの

○おみ深
 宝永のころ中村子深といふ芝居者けりおみ深を
 さるるいゝをふくむ成仙さるるあまのいゝをふくむ成仙さるるあまの

暹羅漆

暹羅八國のあま日本より凡そ西百里といふあまより
 まるる漆を採りて日本にけり漆又華布といふ
 中華より漆を採りて日本にけり漆又華布といふ
 も文来漆といふ漆はあまのいゝをふくむ成仙さるるあまの
 漆よりあまのいゝをふくむ成仙さるるあまの
 あまのいゝをふくむ成仙さるるあまの

暹羅	檳榔	葛刺	莫臥爾	聖多默
凡そ西百里	凡そ西百里	凡そ西百里	凡そ西百里	凡そ西百里

○作
 佐常の犬守りけりあまのいゝをふくむ成仙さるるあまの

勝
深

憲法

○小左丈麻子

○
左史
辭子

世壽

今ふりひりき舞ねたるいひのこなり又傳衆の
言ふ所の物し況文（續）繫繪添爲文ヲ

○友泉添

友泉添作たりしもの出本を撰りて添ふなり
も事法にきくものなるなり紙墨所より佳ス

○正平添

肥後國八代古閑橋の邊に生るる天草草と云ふあり
甲冑の威なりしものなり添草なりけ版の中にも不動の
像ハ橋の二字ありし林字あり天平十二年八月と
記せし右神佛の形あるもの土人驚き事をかゝる証西
將軍懷良親王ハ代高田におせし時列板を用
し其高貴なる所免紙ありしより印免草と

一里ハ版南朝の正平六年六月一日とあるもの
正平草と云ふものなり正平添のけりなり

○菖蒲草

城列ハ橋の棟大谷と云ふし神功皇后之韓を
証し其時禮の威なりし草をいへるなり
高麗勝武と云ふ後義家東征の時其法ありし
る舞踏武を大谷ありしもの又秀吉公羽前証文の
時其清ありし諸幾利と云ふものなり其舞踏武
を証しと云ふ又菖蒲と書ハ仲夏の節に草を
添ふもの菖蒲と云勝武と通音

○紙衣

元律僧衣を著けし女のみ紙衣なりしものなり

僧徒のくきを洗くの際に都二月堂を脱ぎ
一用紙衣

大坂一用と云ふものをも製し至くはうき
又糸を煮て黄地襦袢の代をすべし

○一端定尺

寛文五年に緒布一端の長さ二丈二寸五分
定尺に依りて

○袖袂

神祇に奉るものには袖は二尺二寸五分
定尺に依りて

袖

今世二尺をみりては八尺袖は定尺より
多くぬき又八尺袖は袖のふちより
今又角袖にても八尺より多くぬき
天和のころは八尺袖のふちより多くぬき
江戸より寛文延宝のころは八尺より多くぬき
天明のころは八尺袖のふちより多くぬき
今世は八尺袖のふちより多くぬき

○袖縁 袖口

細川三斎の何れもきりて始末のたえみ

その頂の裏を引出し袖口（紅色）を裏返し、その列の
色に霞輪をさし、し自然の風情となりて、今也

○道服

襦 又羽織

道服襦おけし、後、大臣至極の藝、あれを着、
烏帽子を被る、因、烏帽子道服、云、民俗衣、
人、短衣を着、是、及、服と云、官家の道服、云、
ものあり、より、庶人の袴、云、又、襦、馬上、具、
漢の襦、袖、細、云、小、袖、云、敷、ひ、は、
襦、袖、云、今、陣、襦、云、敷、ひ、は、
と、称、もの、又、お、人、衣、云、敷、ひ、は、
今、より、羽織の文、云、又、法、殊、の、著、直、綴、
編、綴、官、家の道服、云、云、云、

○上下

藤原相國義隆、云、時、也、野、合、我、正月、元、日に、
事、なり、
信長、云、時、也、永、澤、正、也、云、云、

○白衣

世俗、
袈、
を、
脱、
云、云、

○標幟

天、
云、云、

○ 绵
帽
子

雲と雷とくうの根も子に老せぬ縁ゆ

○ 沃之要帽子

え孫の姑は萩野に嫁して云々を被る
そあうなを松のむすを被る
おとうはうーたえ

○
○
女に
穀こく
部ぶ

明暦百治のころより新なる東紙圖法なる茶屋
 其茶店のあるる所、常のよけらむをむきひて
 うーろくまの油なり、前もてもむきゆるさう
 あり茶店の土をきり一人より二人へつてゐ
 とわく、舊来の傾城ありは茶店に女衆とむきふ
 京の町又田舎よりして世間一統には成らず
 なりたるが勝義なり今も江戸にありは武家乃
 奥平にたりとも子常事とするものなり

○吉きち 尅や 造し

此室のふと村吉澤と云はるゝの若むらじあ
たり今此女子あはれをよとてたそのあかへ男

○
油
皮

○ 粟紙袋

追世の製なり実と云ふはびり、
 九散の葉あり、
 今のは、
 懐紙と云ひ、
 紙をとりて、
 懐紙の必要あり

○ 眞田

天正のころ吉田阿波守が来りて浪人の如く大小の柄を在りて
のち糸を巻て成人あはれをまゝに阿波守云ふ人となりて
縁を着てゐる人も襦袢を利きまゝにひねをアゲ
ておれ正宗のやうな世人の縁の海
を泳ぎて真田赤と云

○
夜
着

慶長元和のころよりおもしろく
 の秋のころよりなるを手に
 けてとることもおもしろく
 やるゝあつておもしろく
 是と古法をおのりて貞徳を人

布子

○
編費

方以解

むいふの事とて、いふ事おとの衣被なく、いふ糸をぬき、おと給と
し、いふ事おとの衣被なく、いふ糸をぬき、おと給と
其れを賜ふ麻衣をぬき、いふ事おとの衣被なく、いふ糸をぬき、おと給と



飮
食

○茶

日本紀云弘仁七年壬辰^{（一）}倭皇^{（二）}以御^{（三）}流^{（四）}廣^{（五）}（陽^{（六）}嘉^{（七）}）
 乙未^{（八）}時崇^{（九）}福^{（十）}寺^{（十一）}の天^{（十二）}像^{（十三）}如^{（十四）}永^{（十五）}太^{（十六）}女^{（十七）}の^{（十八）}茶^{（十九）}を^{（二十）}剪^{（二十一）}
 ちとありけり時代、唐茶^{（二十二）}を日本^{（二十三）}に茶^{（二十四）}植^{（二十五）}せらる
 乙未^{（二十六）}壬辰^{（二十七）}土^{（二十八）}陽^{（二十九）}門^{（三十）}院^{（三十一）}の^{（三十二）}法^{（三十三）}常^{（三十四）}建^{（三十五）}寺^{（三十六）}の^{（三十七）}西^{（三十八）}祖^{（三十九）}千^{（四十）}光^{（四十一）}は^{（四十二）}昨^{（四十三）}茶^{（四十四）}を^{（四十五）}剪^{（四十六）}
 入り茶^{（四十七）}の^{（四十八）}種^{（四十九）}を^{（五十）}廣^{（五十一）}く^{（五十二）}由^{（五十三）}明^{（五十四）}は^{（五十五）}唯^{（五十六）}慈^{（五十七）}光^{（五十八）}は^{（五十九）}種^{（六十）}を^{（六十一）}植^{（六十二）}
 うりて梅^{（六十三）}尾^{（六十四）}を^{（六十五）}茶^{（六十六）}の^{（六十七）}種^{（六十八）}と^{（六十九）}稱^{（七十）}せり^{（七十一）}梅^{（七十二）}を^{（七十三）}種^{（七十四）}と^{（七十五）}稱^{（七十六）}せり^{（七十七）}而^{（七十八）}以^{（七十九）}深^{（八十）}淵^{（八十一）}
 云て今も梅^{（八十二）}の^{（八十三）}種^{（八十四）}を^{（八十五）}茶^{（八十六）}と^{（八十七）}稱^{（八十八）}せり^{（八十九）}而^{（九十）}以^{（九十一）}深^{（九十二）}淵^{（九十三）}の^{（九十四）}種^{（九十五）}を^{（九十六）}茶^{（九十七）}と^{（九十八）}稱^{（九十九）}せり^{（一百）}
 幸^{（一百一）}得^{（一百二）}梅^{（一百三）}山^{（一百四）}信^{（一百五）}嘗^{（一百六）}日^{（一百七）}本^{（一百八）}茶^{（一百九）}の^{（一百十）}種^{（一百十一）}を^{（一百十二）}剪^{（一百十三）}
 報^{（一百十四）}し^{（一百十五）}て^{（一百十六）}梅^{（一百十七）}と^{（一百十八）}稱^{（一百十九）}せり^{（一百二十）}其^{（一百二十一）}後^{（一百二十二）}今^{（一百二十三）}も^{（一百二十四）}梅^{（一百二十五）}と^{（一百二十六）}稱^{（一百二十七）}せり^{（一百二十八）}

又利子硃砂葉室方和の室生修愛の服部修愛の河上
 清河の清光武義河城子（梅尾）河子なりて上品
 あり（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）
 享保（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）
 茶一盞を（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）
 茶の（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）（元）

○茶乃湯

茶^ち礼^れ乃^の式^{しき}東^{ひがし}義^ぎ政^{せい}公^{こう}子^しほ^ほ南^{なん}都^と称^{しょう}名^な等^{どう}の^の珠^{しゆ}光^{かう}
 禮^れの^の事^{こと}を^を後^ご徳^{とく}に^に側^{たて}の^の能^{のう}河^か江^え相^{さう}深^{しん}近^{きん}長^{ちやう}志^し野^の
 三^{さん}高^{かう}虎^こつ^つ射^{しや}宗^{そう}信^{しん}は^は通^{とう}あ^あず^ずは^は礼^れの^の夷^い砥^{てい}の^の隅^{ぐも}か^か
 氏^し士^しも^も乃^のを^を常^{じやう}に^に様^{やう}を^を中^{ちゆう}へ^へて^て信^{しん}を^を傳^{でん}う^うと^とも^も
 う^うが^がる^るい^い織^おの^のわ^わが^がり^り友^{とも}野^の紹^{しやう}臨^{りん}と^と乃^の子^し方^{はう}寸^{そん}齊^{せい}宗^{そう}尾^び

利休その子通玄有永二郡織部遠列宗和宗且
 留掃部常拙宗信ももも利尚なり
 茶礼の禅師源直の孫を撰一質素閑靜を以て
 けものとして宗通たる人を和尙とすやうに
 有樂流
 織田源五郎信重・信長の子なり薙髪
 乃後車より名し有樂と云は流織田定置より
 定置の信長の孫信定の子し今ハ茶々家と云
 定置の子に都栗吉野氏なり現在
 金森流
 出雲守源義宗和と稱す
 石列流
 河相石見守後宗圓と云宗和の子し
 小堀政一薙髪して宗甫と稱す寛永
 頃乃江原氏なり宗甫は古田織部正室孫の子にて

利休流 今利休より千利休の系列傳の今
父千河孫と云ある士の流なり本姓を以て
千の一字を名とし中興茶通の祖なり

千利休 始子四郎ト云 抛笠斎宗易
紫野大徳寺ノ山門ノ上ニ像アリ

道安 眠翁

宗旦 元叔

宗掘 用翁

紹安

今日庵咄奇

伯元

宗佐

堪笑軒

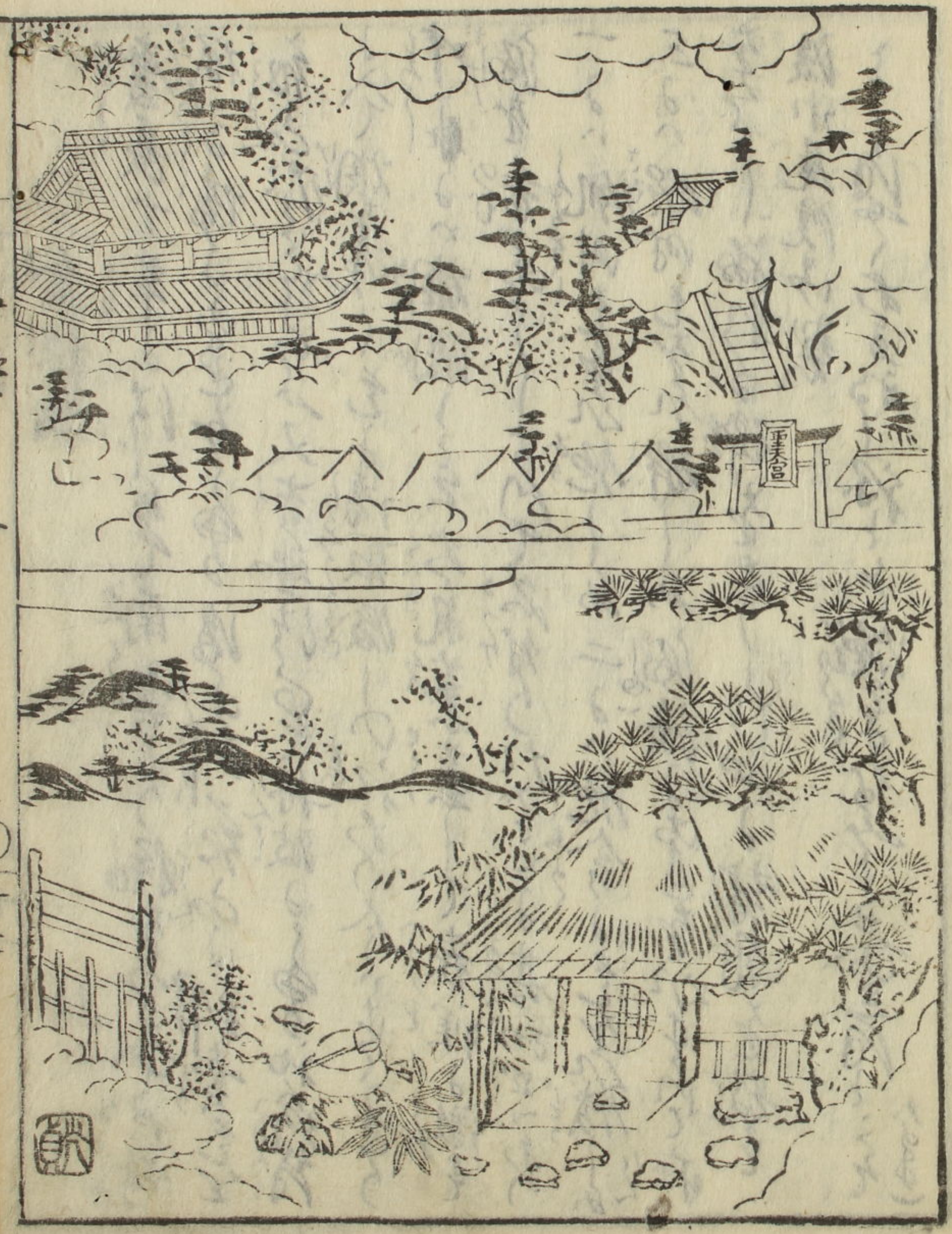
利休云茶の四番 能和 能敬 能清 能寂

袋棚

茶人紹鷄好て作る

去野大黒庵紹鷄一雨と云

茶名を大黒庵と云ふを袋棚といひて作る



○
丸
屋
水
肥

○
大
佛
餅

なり是に永肥を造るはめでたしで求肥所云
○大佛餅
根元へ束ね糸等敷きこれを製成す今人堂上人も
さる至其味物なり又古唐事大佛殿の事あり
これ又ぬまり江戸浅草寺で製せらるる此を餅と
大佛餅の名目を以て近世お茶の餅あるは條なるは條
を併する條の新び多く松葉松折玉菓子として賣
りたり又は條のむし一々を以て書物せし描
きたりと今ハ市に條ありて折お折きたりに
くく晴れる客入の出ーぐー牡丹のかしらぬる
あるは牡丹餅とも呼ぶ又萩の花の餅ともいふ
堂上人より今ても必要歟あるうしと明か

足利親氏の孫鶴岡社系の家系と云うを述べ
一説よりあるに二説は海老二説はのり候めて
やうぬつとあると云ふ今も所田舎を磨く
のぬきまをば候も答へむのさだなり
うきに古来の田舎ありて家系はのりなり
半一なり

○世世傳

根元は古國橋西端ありて赤津地所に候てと云ふ
傳をあるに其の姉と云ふと云ふ大の世の藤澤の
某より大の姓なりと云ふ一云藤十七年にありて
藤十をいふ其傳甚味ありて云ふ今あるに
名あるにふし確ものし何れも世世傳と云ふなり

○花伝

本町田向院の系は花伝と云ふと云ふて花伝と云ふ
と云ふの系は十一年の秋のころよりと云ふ

○花傳

根元は浅草合衆と云ふ大の系は花伝と云ふと云ふ
花伝の系はと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

○花傳

根元は浅草合衆と云ふ大の系は花伝と云ふと云ふ
花伝の系はと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

○花傳

花月の傳を述べと云ふ其狀の似るもの候と云ふ

郭く 詔を 稜 罪を 具足し 悔ふる 稜 悔ハ 斬
教の 詞を いふ 又を 入と 缺中へ 之を 缺 悔ふ
今ハ 斥 悔を 止めて 悔ふ 悔ふ

餅屋

江戸を俳風といひて、茶俳の根えハ芝田所鶴亭
より、そのむらじゆなりと云

飛圓解

正徳元年八月、甲子、八日、つら傷やうの不勳を回覧し
國後あり。時、支那の東端に於てあることより
慢進はあてられず。其の果して然ることを
人の心ならずとも下の長と刻するものなり。
そのころ、越後國と称せし壯士もあつた。

[illegible]

○蕎麥切

中世二百年の事の書と云くは食物を詳に記せる
にもとむ如き事と云ふべし然るに魚蟹類を多く
と云ふ河漏瀬と云ふ船名の湊の所也東唐より
之れを造らうと云ふ河漏と云ふ日本のもとの如き
江戸のそとりの堂次といはれ國ともなひ

○ 懶 食

江戸物所 佐渡物所よりもの如てこれをあつむ
そのうちやにやうてさう前市川が堀に所より香を
本所 佐渡物所大堀物所からとるものや中には紅曲
丹は金赤にうすものもあつてさうして香をきくと
とるもの味をうてくものやあつてのん又給はつてん
あつてのんやあつてのんは懶食なるん又さうして
して儉緻にやうして儉緻なるん又さうして

○ 香 物

おぼろ香物 漬干より出るものし 薑粉 平
舞本をうすく片に五分の大きさで 漬浸し
その香氣をうすくして香をきく漬干より

あつてのんやあつてのんは懶食なるん又さうして
その香氣をうすくして香をきく漬干より
あつてのんやあつてのんは懶食なるん又さうして
その香氣をうすくして香をきく漬干より

○ 澤 菴 漬

東海寺の田祖 漢菴 和尚の漬よりあらうし

○ 一 休 納 豆

大徳寺 珠菴 乃 納豆 一休和尚の製法し 唐子
納豆のよりを豆鼓と云う

○ 豆 腐 肉 紅 葉

堺 經 云 紅葉をける人の多く 實拾ふと云う

祇園豆腐

野腐田系

して梅のうを梅の梅の之をぬふ曲ありは
 人子梅の所をうぬけふふくそぬをうふ
 つぬきうふふふふふふふふふふふふ
 乃津奈ふふふ曲あり

地黃丸

○
水
地

水鏡
新編
春日
の
法
心
月
精
堂
又
は
一
送

少きを清糖と云ふは水竹なり

○焼鹽

元禄年中洛上時島村茶屋郎と云ふの糸列屋材を
住居に記列報を土壺に入て焼く一法列を
と壺を底を布と云ふ糸三平甲午
うわゆきくも天下一の糸を時奉石河氏令
して賜ふ又延宝七年雁馬司殿下う折紙状を
ゆふゆふと云ふ様丸をの糸壺と云ふゆふ

○蒲糸

糸因を産く細き糸を壺をやくその糸を
蒲の糸に似る糸を糸今作輪と云ふ山世に
小板に貼ると云ふとびーの糸をゆふ

○様焼

穀を産くか焼紅糸の色なる糸をやくその糸を
その状と云ふ様皮の糸を糸を糸を糸

○浅草川白魚

寛永の末白魚の流をまうがられし

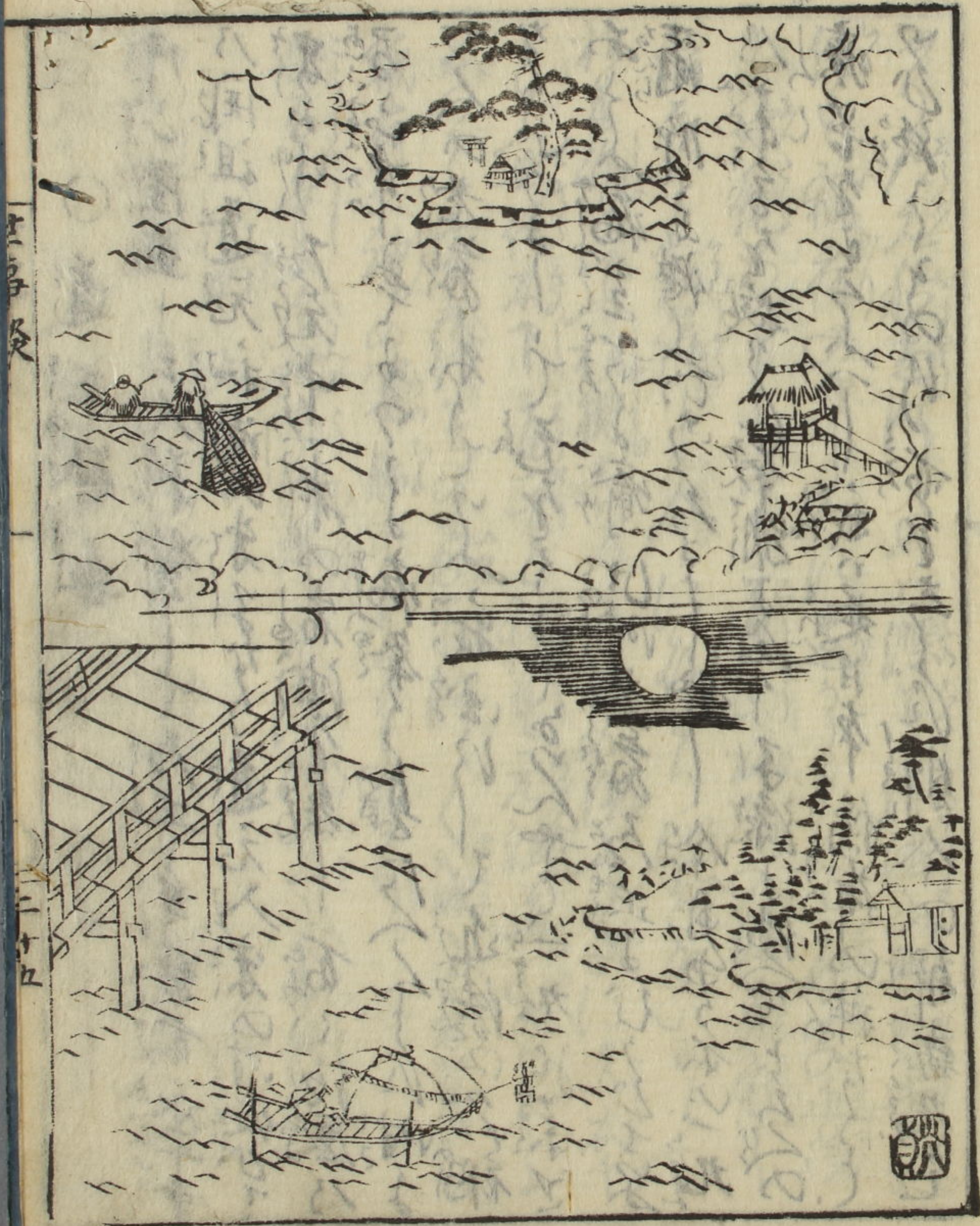
○源又郎鮎

近江の産なりは湖湖北尾上信津と云ふ所を産
その糸の長を源又郎と云ふし糸を糸又源又郎
と云ふ源人多く源と云ふ我儘の産糸糸糸又源又郎
は糸の糸糸又云元禄其頃鮎なり、助鮎は正月の
糸糸糸二月乃至三月糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

みゑと人のふりよひあはれ

○楚

比一楚割とてて裁後を上品に楚西國より
 國東の船なり一國子楚なり一その土地よりわく生桂
 子楚の奥列より今も葉の
 東楚云文治六年十月十二日遠江國菊川の島よりあつて
 佐々木之郎盛綱小口をとおし船の楚割を折安子居
 子息小童をいれ渡りて進路よりやて云ふ今も
 削合せしめふし味もさる楚切なりとてこ
 めるふきふきとてはふ自毛一はひおまにやとて
 中らそふ人のふりよひあはれとてあつて
 此時代のやうな事ありとてあつて



道正解毒

所に隆盛と云人利繁して乃正と号執前永平寺
 乃同祖通元和尚の弟子なり道元入宋の時従ひて
 密より乃兄中洲の宿法を祭し而く總展乃
 る山中其めつる病疾を息た人今其時よ
 一人の老翁ありていふ我よりて近頃の名神
 なるいふしてををく一丸を来と
 あく病を治す時老翁乃正とむといふ子
 爾時母を獲ていふ一丸を来と
 今其母を獲ていふ一丸を来と
 疾苦を治す一丸我は是日本橋荷の神なりと
 心決するより其母を治す一丸今其母を治す

ありんたえわがけしめい深き佛法に興聖事い
 けと稱荷のちしに遠くもれども必の追隨
 と神虎ありしあり通正海部の後影を
 稱をを勸導し今に好むしをいめし
 松も病といし松樹ありてその陰ふさぎにあり
 といふ世俗末下通平と稱を元祖通いなり今
 といふ二十九代その名おはしく成りあがり
 稱荷の神の勲ありしなり
 聖事ありし追隨し治郡を治めんとし再興あり

○西
大
寺

豐心舟いんしんふね
院中いんちゅうより出る事ことも世俗せじやく
佛祖統記ぶつそとうき云々いんしんふね

定齊藥

大朝の所託惟教よりその期勉を属す奉詔し
るより果て其の力を盡すこと能はざるを以て
其の天性の優をぬき後云

猶余を伴ふてさうの御心定新をやして
 俳優をなさむと因て御意に應じしは惟だ
 らぬ方を授けらるゝお疾風といふ下へそなたを
 引く定新某と云ふいふ人佐病を治す事明に
 今京東川院青木屋い定新の裔なり

○ 粟ムギ 山ヤマ 小粒丸コリゅうがん

幸^くふ^ふけ^け平^{へい}お^お傳^{でん}る^る小^{せう}児^に万^{まん}病^{びやう}の^の食^{じき}米^{まい}なり

○ 外郎

應安のけめ大元の老臣持部貞外郎陳宗教と
いふもの執事國性多の能いさくるおえの至正年中
大元のうきよの亡婦宗教二君より久しとて遠く
幸ねめさる。將軍義隆公の命をすたさひ

す、相よりとて、今も相に人、文、材、情、達、行、て
相よりとて、又、聖方を修し、深き業、福、寺、無、方
和尚の室に入り、衣、鉢をうけ、明照と号、歟、七十
有余、うして、卒、とて、事、唐、京、都、を、さ、る、西、明、院
に、住、し、遠、頂、香、を、製、し、蓋、遠、頂、香、と、い、ふ、云、卿
居士、人、冠、の、甲、子、入、り、髪、の、具、氣、を、去、り、周、く、は
る、あり、又、相、列、小、田、系、の、遠、頂、香、い、け、餘、流、し、種、余
の、時、は、葉、を、小、田、系、の、土、人、の、ゆ、き、と、云、小、田、系、の、系
新、い、れ、し、唐、僧、大、光、禪、師、の、名、を、す、以、来、組、て
諱、は、道、隆、ト、云

